

長谷川如是閑研究序説

田中 浩著

田中浩著

長穀川如是閑研究序説

未來社

著者略歴

田中 浩（たなか・ひろし）

一橋大学社会学部教授（政治学）

著書に『ホブズ研究序説』（1982, 御茶の水書房）,

『近代国家と個人』（1989, 日本放送出版協会）

共著に『政治学への接近』（1978, 学陽書房）

訳書に『帝国主義と知識人』（1979, 岩波書店）

共訳に『リヴァイアサン』（1966, 河出書房新社）, 『政治的なものの概念』（1970, 未来社）『かれらは自由だと思っていた』（1983, 未来社）など。

長谷川如是閑研究序説

——「社会派ジャーナリスト」の誕生

発行——一九八九年二月二〇日 第一刷発行

定価——二八八四円

（本体二八〇〇円・税八四円）

著者◎——田中 浩

発行者——西谷能雄

発行所——株式会社 未来社

東京都文京区小石川三十七二

振替（東京）七七八三三五

電話（03）814-5521～4

印刷——三容堂印刷

製本——小泉製本

ISBN4-624-30065-3 C0031

序

——普遍的価値の創造を求めて——

今年（一九六九年）は長谷川如是閑「没後二〇年」目にあたる。二〇年という歳月は、個人にとってもまた社会全体にとっても、なにかと目に見えるほどの変化が生じるタイム・スパンであって、そのことはいま、二〇年前を振り返ってみて、だれしもがそれぞれの意識のうえで強く感じることができであろう。

如是閑が、あと二〇日あまりで満九四歳を迎えようという一九六九年一月一日にその天寿をまっとうしたころは、戦後民主改革期、第一次安保改訂反対闘争期（一九六〇年）と並んで、戦後日本政治史のなかでも特筆すべき全国大学を中心に展開された民主化闘争がようやくその収束段階を迎えようとしていた時期であった。そして、全国的規模での大衆動員をともしない激しい民主化闘争はこれを最後に終りを告げた。

その後の日本の政治過程は、高度成長の波に乗った異常なまでの経済的繁栄に幻惑されて、政治の面でもまた国民意識の面でも安定化志向が急速に進行しかつ蔓延した。こうした状況の下で、戦後ほとんど政権を独占し続けてきた保守党支配はますます安定の基盤を固めていったが、そのおごりと金権政治のなかで「ロッキード事件」（一九七四年）のような構造汚職が発生した。しかし、この事件は、保守党はもとより国民の政治意識内部においてもそれほど深刻な反省を呼び起こすことはなかったように思える。そればかりか、八六年の「ダブル選挙」

では、保守党は三〇四議席という大量議席を獲得し、時の首相は、それを「戦後総決算の時代」が到来したと位置づけ、農村部だけでなく都市部においても保守党支持が拡大したことを戦後四〇年間における保守党支配の成果として自画自讃した。

それからわずか三年も経過しない八九年七月の参議院選挙においては、農村部や一人区では絶対に保守党候補が強いとされてきた長年にわたる常識を打ち破って野党候補が圧勝するという事態の変化が生じた。もっとも、こうした事態の発生をもつてただちに野党連合政権が登場するとは思えない。しかし、今回の選挙において、日本国民の多数が、それこそ久方振りに「主権者」としての自覚を回復し行動したことだけはたしかである。

大正デモクラシー時代から戦後の約二〇年間にかけて、自由と民主主義の発展のために、半世紀以上にわたってきわめて精力的に啓蒙活動や言論活動を続け、そのさいつねに、普遍的・原理的立場から、それぞれの時代における日本の政治・思想状況について鋭い批判と建設的な意見を提示してきた如是閑が、いまこの時点に生きていたら果してどのような診断を下すであろうか。

如是閑の一世紀近くに及ぶ長い生涯をみると、かれが生まれた年は、その前年に、日本によりやく民主的政治制度を導入しようとする国会開設運動がはじまったばかりの一八七五年のことであり、その亡くなった年は、一方ではまだ大学闘争の興奮が醒めやらぬ、しかし他方では高度成長の大波が国民生活のすみずみにまで押し寄せようとしていた前夜の時期であり、また国際的にはヴェトナム戦争の真只中であった。その意味でまさにかれは、「嵐の中の百年」を生き抜いた、日本近代史の「現場証人そのもの」であった、といえよう。

たしかに、戦後日本における民主主義への転生は、如是閑にとっても、戦前かれが少数の同志たちと孤軍奮闘しつつ発言し続けてきた政治・社会改革への提唱が、以前とはまったく比較にならないほどのスピードと実現の

可能性をもって進行しつつあるやに思えたほどのものであったろう。しかし、かれは、戦争直後のすべてが民主化へと向う疾風怒濤の時代にあっても、なおこの日本において、封建的・国家主義的・軍国主義的傾向がいぜんとして根強く残存している状況を憂え、「オールド・リベラリスト」と自称しつつも、日本の政治・思想状況についてきびしい批判や発言を加え続けている。そのことは、かれが、戦前・戦後の日本の知識人のうちでも、近代三〇〇年間の人類史の発展における、自由の獲得・民主主義の実現をめざす思想的営為やそのための闘争の歴史を最もよく把握していた最高の知識人であり、またそれにもとづいて、戦前、(超)国家主義、軍国主義、ファシズムと勇敢に闘い続けてきた数少い啓蒙思想家の一人であっただけに、一段と重みがある。

如是閑の思想家としての態度や立場に共感しうる点が二つある。

一つは、かれが全生涯を通じて、いささかも原理的態度を失わず、しかし決して公式主義的態度に陥らず、きわめて柔軟にそのときどきの状況を敏感に洞察しつつ、客観的かつトータルな観点から時代変革の目標に立ち向っている、という点である。そのことは、かれが、すべての問題について、つねに基本的・原理的な研究をおこない、それにもとづいて現実政治を考察するという態度をとり続けてきた結果にほかならない。

もう一つは、かれが、あらゆる権威主義的思考や行動を嫌い、つねに弱者の立場に身を寄せて、一般民衆の幸福と安全の増進を願って発言し、そのためにたえず歴史の進歩の方向を模索し続けた点である。

まず第一の点についてであるが、如是閑は、講和条約締結一年前の『世界』(一九五〇年九月)のアンケート、「私の信条」に答えて、日本民主化の再生のためには当面の政策を考えることも重要かつ緊急であるが、迂遠の道のようにだが、「根本の問題だけを」考えよ、つまり、原理的・普遍的な価値を理解し重視する態度を日本人は身につけよという趣旨のことをくり返し述べている。戦後、言葉のうえだけでは「一億総懺悔」を唱えながら、この

敗戦によつても、「なにごととも忘れず、なにごととも学ばず」（ヘーゲル）、ひたすら私益の追求に狂奔している当時の日本人の意識と行動を苦々しく眺めていた如是閑の姿をそこにみる思いがする（「敗けに乗じる」『文藝春秋』、一九四五年二月）。

さて、この如是閑の発言は、第一次世界大戦が終結してまもないころ、マックス・ウェーバーの盟友でかつ世界的な宗教社会学者エルンスト・トレルチの著名な講演「世界政策における自然法と人間性」（一九三年）を彷彿させる。ここでトレルチは、今次の大戦におけるドイツの敗北は、「思想の闘い」をめぐる敗北であつたと位置づけている。つまり、かれが述べんとしたことは、かつてイギリス人やフランス人は、一七・一八世紀の時代に、人間の自由や平等の重要さを人類普遍の原理として認識した近代自然法の思想を構築し、それを基盤にして近代民主主義の実現に努めてきた、これに対してドイツ人は、「ドイツ的なもの」とか「ゲルマン民族の優秀性」といった偏狭なドイツ・ロマン主義に固執し、そうした特殊の価値を信奉し続けたことが、ドイツの近代化・民主化をおくらせた、したがって、今後のドイツ人は、近代自然法の理念が伝える普遍的価値を追求できるような精神の変革が必要である、というものであつた。もっとも、トレルチのこのドイツ国民への忠言は、不幸なことにドイツ人の間に理解され普及化されるいとまもなく、わずか一四・五年の間に、ヒトラー政権の登場を許し、ドイツ国民は再度悲惨な第二次世界大戦へと駆り立てられていったのである。

戦前において頑迷な国家主義と闘い、狂暴なファシズムの脅威にさらされた如是閑は、戦後になつてもいぜんとして根強く残存している憂うべき日本の思想状況のなかに、かつての「ドイツの悲劇」が再発する危険性をもとっていたのかもしれない。

ところで、明治維新时期においても、また戦後民主改革期においても、その政治・経済・社会体制の変革は、多

分に「外圧」によるものであり、日本国民がみずからの力でかちとったものではなかっただけに、普遍的価値を求める原理的思考態度の確立は、日本人にとってことのほか困難かつ理解しにくいものであったろう（敗けに乗じる）。だからこそ如是閑は、敗戦直後の、「敗けに乗じる」という論説とほぼ同じころに書いた「民主主義の歴史的發展」（『週刊朝日』、一九四五年二月三〇日、一九四六年一月六日合併号）のなかで、日本人にとっての急務は、西洋民主主義の成立と発展の事情について学ぶべきことだ、と述べ、またこの点を無視すると、明治二〇年代以降のような日本の二の舞いになる（『民主主義の歴史』『文藝春秋』、一九四九年）と再度、警告を発していたのである。

戦前において、如是閑が狂暴な国家権力と対決するために、国家論、政治論、社会論、労働論、国際政治論、新聞論、教育論、文明史論、女性論、芸術・文化論、ファシズム論などを展開したさいには、必ずその批判の根拠を歴史研究や社会構造の分析に求め、また欧米思想と日本の思想とを比較検討しつつ、それぞれのテーマを解明し、それによって時代の課題に答えるという手法をとっているが、それは、かれが人類共通の普遍的価値の趨勢を読みとることの重要性を十分に認識していたためであらう。

次に第二点についてであるが、かつて大宅壮一は如是閑を評して、如是閑には三つの顔、第一はイギリス流のリベラリスト、第二は雪嶺流のナショナルリスト、第三は深川生まれの江戸っ子、の顔がある（『長谷川如是閑の三つの顔』『サンデー毎日』、一九六九年一月三〇日）と述べている。この如是閑評をどのように受けとるか、如是閑研究者によってさまざまな解釈がありうると思われるが、わたくしはこう考える。

如是閑が本格的に活動を開始した大正デモクラシー時代は、もはや人間の個性的自由や政治的自由・経済的自由の拡大を求めるだけでは解決のできない問題、つまり貧困・失業・劣悪な労働条件などを含む広汎な社会・労働問題が世界的にもまた日本においても顕在化かつ深刻化してきていた時代であった。したがって如是閑は、明

治期以来のリベリズム——その力はきわめて微弱なものであったが——の思想的系譜をたんに受けつぐだけにはとどまらず、この新しい課題に取り組まなければならなかった。そこでかれは、欧米において発展してきた古典的自由主義の価値を、その主宰する雑誌『我等』・『批判』(一九三〇年に『我等』を改題)を通じて啓蒙・宣伝・普及しただけでなく、一九世紀末以来の欧米諸国で登場してきた「政治改革」だけでなく「社会改革」をも展望するいわゆる「社会(的)民主主義」の立場を標榜し、そのためには、社会主義者やマルクス主義者たちにも広く誌面を提供し、ときにはまた共同行動をもとめた。かれが、日本のラスキと呼ばれる所以はここにある。

さて、如是閑が、中産階級や労働者階級の立場を支持し、政治的平等や社会的平等を主張したことは、福沢諭吉をはじめとする明治初年の知識人たちのようなたんなる古典的自由主義を啓蒙・普及する立場と如是閑のそれとを異ならせる決定的な要因になった。またそれによって、明治二〇・三〇年代に活躍した、日本のアダム・スミスと呼ばれた「商業共和国」の主唱者田口卯吉とも、あるいは「日本主義」(西欧の良きものはこれを謙虚に摂取しつつも、いたずらなる欧化思想に陥らず日本の良き伝統はこれを守ることを主張した新しい国民論派の立場)を標榜し、「超然主義」をとる藩閥政府の封建的政治支配やその国家主義と闘い、「憲法制定」・「国会開設」の手段を用いて真に国民の利益を実現するための——それは、多分に幻想にすぎなかったが——「政治改革」をめざした陸羯南・三宅雪嶺のような政論派自由民主主義者たちとも如是閑は一線を劃することになる。

もとより如是閑は、思想系譜的には、羯南・雪嶺らの「政教社グループ」の最も忠実な後継者であり、そのことは、かれが『大阪朝日』の記者時代や『我等』・『批判』の時代に、一貫して国家主義を批判し、言論・思想の自由、大学の自治などにかかわる市民的自由の拡大・確立に全精力を傾けたことによくあらわれている。しかし、それと同時に如是閑は、労働者の権利や弱者の地位を守るための社会・労働運動を断固として支持した。したが

って、大宅のいうイギリス流のリベリスト如是閑とは、個人自由の確立と社会・労働問題の解決を同時に展望していたホブハウス、ラスキ流の新しいリベリズムの立場をとるリベリスト（社会的民主主義者）であった、と解されなければならないまい。かれを社会派ジャーナリストと命名した理由はここにある。そして、如是閑のリベリズムの内容がこのようなものであったからこそ、戦時中多くの「リベリスト」が次々に戦争協力者に転落していったのにたいし、かれは、石橋湛山、馬場恒吾、清沢列、河合栄治郎らとともに反ファシズムの立場を守り通すことができたのである。

また、一見、排外主義的な国家主義思想の主唱者というイメージを与えかねない、雪嶺流のナショナルリスト如是閑という大宅の表現は、如是閑が、無批判的な欧化主義思想に陥ることなく、羯南・雪嶺らの自由民主主義の立場を正しく受けつぎつつ、日本人の主体的努力によって日本における民主主義の確立をはかったすぐれて独創的な思想家であったという意味においてはじめて首肯（しゅこん）できるというものである。

さて、如是閑の第三の顔、深川生まれの江戸っ子気質であるが、イギリスの民主主義思想は、ホッブズからラスキにいたるまで、つねに人間尊重や非権力者の立場を守る政治・社会思想として発展してきたものである。この点で、田口の『日本開化之性質』（一八八五年）にもあるように、江戸下町の「職人の世界」に長年はぐくまれてきた庶民的生活様式（ライフ・スタイル）はイギリス思想と大いに親和性をもつものであったろう。如是閑が好んで口にした言葉に、「国破れて山河あり」をもじった「国破れて生活あり」という一句がある。ここには、人間にとつての最高の価値は、個人の自由、個人の安全と幸福を基調とする国民国家の形成という民主主義実現の構想が含意されており、またこの言葉は、戦前日本における国家主義的傾向にたいする庶民の側からの痛烈な異議申し立ての表明である。したがって、この「江戸っ子気質」を、如是閑の軽妙洒脱、ユーモアのセンスにあふれたライフ・スタイルとい

う側面に重点をおきすぎでとらえるならば、かれが、そうしたやや斜^{しや}にかまえて「搦手から」政治や社会を評する語り口や話法を通じて、実は、終生、権力と闘い続けてきた戦闘的な自由主義者であったという本質を見落すことになろう。

如是閑はファシズム擡頭の前後の一九三〇年に『我等』を『批判』と改題して新しい理論戦線の強化を企図するが、その創刊の辞に

「すべてのものは流星のように動いて行つた、そして全体は山のように不動である。……われわれ自身が、……あわただしげに何かを求め、何かを棄てずにはいられないところに、いかにわれわれが歴史の動きを求めているかを知るのであるが、……歴史は頑として動かない。……時代が、社会が、歴史が依然として一つの所に立ち止まっている、食い過ぎた驢馬のように。

……

いかなる拍車をもつて、この頑くかな驢馬のどこを蹴つたら彼を動かすことができるのか。それがわれわれの問題であり、その問題の解決がわれわれの仕事であることに变りはないが、新たな気力と、新たな武器と、新たな方法と、それに新たな名『批判』を与えたのである」

と述べている。

如是閑没後二〇年、一九八九年の夏、このとき、「山が動いた」という状況がみられた。われわれは、このような状況の変化を新しい民主政治への飛躍の契機とみて喜ぶが、しかし、これをもつてただちに時代の変革と前

進を意味するものとは決して樂觀視していない。なぜなら、普遍的価値の思想が国民各層のすみずみにわたって滲透するまでは真の民主政治の実現は到来しないからである。

如是閑がその生涯の半世紀以上をかけて、いまからみればそれこそ想像を絶するような困難な状況の下で悪戦苦闘して築き上げてきた思想的営為の跡から、われわれはまだ多くのことを学びとる必要があるように思える。

第一章 長谷川如是閑

——思想の軌跡——

一

長谷川如是閑は本名山本萬次郎、九歳のとき曾祖母長谷川多美の養子となり長谷川姓を名乗る。一九〇七年（明治四〇）一月から「如是閑叟」と号した。如是閑は、一八七五年（明治八）一月三〇日、東京の下町深川に生まれ、一九六九年（昭和四四）一月一日、湘南小田原の地で長い生涯を閉じた。享年九三歳であった。その意味では、如是閑は、政治的立場こそ異なるが、かの蘇峰徳富猪一郎（一八六三—一九五七）と並び称せられる明治・大正・昭和の三代を生きた大ジャーナリストであったといえよう。

では、かれの思想的立場とはなにか。ひとくちでいえば、イギリス流のリベラリストであるが、このリベラリズムは、一九世紀以来のソーシャリズムの要求をも許容しようとしている点で、いわばソーシャル・デモクラシーの立場をとるものであった。これを外国の思想家と比すれば、如是閑は、イギリス労働党の思想的リーダーかつ二〇世紀最高の政治学者といわれるH・J・ラスキ（一八九三—一九五〇）とほぼその立場を同じくする者といえよう。また日本における思想系譜でみれば、如是閑は、陸羯南（一八五七—一九〇七）、田口卯吉（一八五五—一九〇五）

らの自由主義的国民主義の立場を継承しつつ、それを大正デモクラシー時代において社会主義と接合させようと試みたソーシャル・デモクラットであった、と規定してはば間違いないであろう。しかも、かれの場合には、通例の自由主義者がマルクス主義を忌避したのとは異なり、マルクス主義をかなりの程度包摂しようとしている点で、かれの立場は、日本における自由主義者たちの中でも特異の地位を占めていたといえる。このように、かれが、思想的に何々イズムといつて硬直化する態度をとることなく、ラスキと同様に、自由主義的・民主主義的要素をもった思想であればすんでそれと手を結び、反動的な国家主義や軍国主義と対決するという寛容で柔軟な立場をとりえたのは、かれが、幼年時代からイギリス流のリベリズムを学び、それをかれの思想の根底に持ちつつ、さらに、リベリズム以外の多様な思想や社会科学の理論をも精力的に吸収し、バランスのとれた、トータルな視点から客観的に事物を考察できる一個の思想体系を形成していく努力を続けていったためと思われる。そこで、まずはじめに、かれが新聞『日本』の記者としてジャーナリズム界におけるその第一歩を踏みだすまでのかれの生活環境・教育環境について、ごく簡単に述べておく。

如是閑によれば、戦前の日本近代史は、イギリス思想とドイツ思想の葛藤の歴史であり、イギリス思想がドイツ思想に駆逐されていった歴史であった、ということになる。如是閑は、英米仏流の近代民主主義思想の立場から、一貫してドイツ流の国家主義やナチズムと対決し、それに批判を加えた。では、如是閑とイギリス思想との出会いはどのようなものであったのか。

冒頭でも述べたように、如是閑は、東京下町の深川木場で生まれ、幼年時代は浅草で育っている。家業は木場の材木商、父徳治郎は浅草奥山の「花屋敷」の経営者であったから如是閑は職人の生活の空気を十分に吸ってその成長期を過している。したがって、如是閑の血管の中には、現実主義、合理主義、人道主義、庶民感覚、ユー

モア、さびのきいた諷刺などのいわゆる職人氣質^{かたぎ}が脈々と流れている。この江戸っ子氣質^{かたぎ}には、およそ権威的な官僚主義とはほど遠い、自由を愛し、庶民の生活事実を重んじるイギリス精神と有無相通じるものがある。日本のドイツ化は、明治一〇年代の末頃から急速に進むが、その方向が一段と明確化されるのは、日清戦争後から日露戦争にかけてのことである。如是閑は、一八九八年（明治三一）に、東京法学院（現中央大学）を卒業しているから、かれは、未だ完全にドイツ思想が学校教育の場に貫徹されていない時期までにその全教育過程を終えていることになる。かれの生まれ育ち、教育環境は、いわば、明治初年に生を享け自由な空気の中で学生生活を送った世代に共通のものである。大正デモクラシー期に国家主義に抵抗したかあるいは昭和ファシズム期に軍部を批判した人びと、たとえば、吉野作造、美濃部達吉、大山郁夫、河上肇、堺利彦、山川均、高野岩三郎、幣原喜重郎、吉田茂たちが、如是閑とほぼ同世代であることはたんなる偶然とはいえないであろう。

こうした諸条件に加えて、如是閑は、とくに、イギリス的思想・文化に接する機会に恵まれていた。かれは、六歳で小学校に入学するが、父の教育方針もあって、一八八五年一〇歳のとき、兄松之助（のち『東京朝日』の社会部長）と共に本郷真砂町の坪内（雄蔵）逍遙の家塾に入塾しそこから小学校に通っている。逍遙は当時、東京専門学校（現早稲田大学）でイギリス憲法史を講じるかたわら、日本ではじめて、シェークスピアの『ジュリアス・シーザー』や『マクベス』を紹介したり、その『小説神髓』（一八八五年「明治一八」九月）八六年四月、全九冊、松月堂刊）において、「江戸時代の文学はイギリス文学に近い」「馬琴はスコットに似ている」などと書いて世人の注目を浴びていた文学者でもあったが、如是閑とイギリス思想との出会いはこの時期に始まったものとみてよい。翌一八八六年、如是閑は、小石川小日向にあった中村正直（敬字）の同人社に入学し、ここで始めて英語の手ほどきを受けている。中村は、明六社同人で、当時ベストセラーとなったスマイルズの「Self-help」（『西国立志編』）や「

S・ミルの“On Liberty”（『自由之理』）の訳者として高名を馳せた明治啓蒙期の代表的知識人であった。如是閑が一〇歳そこそこの少年時代に逍遙・敬字といった当代一流のイギリス学者の下で研鑽を積んだことは、かれの生涯の方向を決定する上できわめて重要な意味をもったであろうことは容易に想像できる。一二歳の時、如是閑は、神田淡路町の共立学校（現開成学園）に転校、パーレーの『万国史』やカッケンボスの『米国史』などを読み、歴史に強い関心を抱き、一時期、歴史家として身をたてようと真剣に考えたことがあった、といわれる。のちに、かれが展開した国家論やファシズム論をはじめ、あらゆる人文・社会科学の分野に関する論稿において、必ず歴史的事実や歴史的発展過程を根底においてその理論を組み立て相手を論破する方法を採っているのは、少年時代からのかれのこうした「歴史好き」と決して無関係ではないだろう。しかし、如是閑は、職業的歴史学者の宿命ともいふべき、細微にわたって歴史事実を記憶するという点で自信をもちえなかったらしく、一四歳のとき、今度は法律家たらんことを目指す。かれの父は法律を学ぶのならば、独法以外の英仏法系が良いという考え方をもっていたので、一八八九年（明治二二）に、父の友人、光妙寺三郎が創立者の一人であった仏法系の明治法律学校（現明治大学）に入学した。またその頃、かれは、三宅雪嶺や志賀重昂らの主宰する雑誌『日本人』の同人の一人、杉浦重剛の東京英語学校（現日本学園）にも通学し志賀重昂らに学んでいる。ところで、明治法律学校は年輩の者が多かったので、如是閑は一年足らずで同年輩の者数名と神田錦町にあった英吉利法律学校の後身東京法学院（現中央大学）の予備科に転校、また一八九二年（明治二五）、神田の大火により東京英語学校が類焼したため、一ツ橋外に移ったバラック建ての国民英学会に通った。ここにはほぼ同じ頃、幸徳秋水も在籍していたはずだが面識はなかったようである。翌九三年（明治二六）、かれ一八歳の時、東京法学院英語法学科に入学、同学年には土佐の民党の指導者楠目玄や新聞記者の茅原華山がいた。しかし、その後父が事業に失敗したので、二年ほど休学し、

一八九六年（明治二九）に、今度は邦語法学科二学年に再入学し、九八年（明治三一）にようやく卒業している。

このようにみえてくると、如是閑の教育環境は、すべてドイツ式官僚・官学万能の風潮に対抗して設立された英仏系の私立学校で学んだということがわかる。かれが、生涯、無冠のジャーナリストとしてその時々々の権力的政治に対して痛烈に批判する態度を取り続けた精神的風土は、かれの修学時代の教育環境に深く根ざしていたものと思われる。

では、如是閑は、なぜ法律家にならないでジャーナリストの道を選択したのか。現代とは異なり、明治三〇年代末頃までは、ジャーナリストとはすなわち時代の先端をいく思想家のことでもあった。福地桜痴、成島柳北、黒岩涙香、中江兆民、陸羯南、三宅雪嶺、田口卯吉、徳富蘇峰、幸徳秋水、島田三郎、尾崎行雄、犬養毅などの論説は、いずれも当時の知識青年、インテリ層に強烈なインパクトを与えた。これらのジャーナリストのなかに、島田、尾崎、犬養、幸徳などのように政治的実践活動に身を投じた者もいれば、思想界のスーパースター福沢諭吉は、みずから『時事新報』（明治一五年創刊）を発刊して啓蒙活動を行なっているし、大隈重信や板垣退助らは、改進黨・自由党系の新聞を配下にもつなど、その態様はさまざまである。ともあれ、当時にあつては、ジャーナリズムの世界は、創成期日本において、藩閥・官僚政治に対抗する最も重要な位置を占めていたことは間違いない。東京下町の反権力的雰囲気の中かで育った早熟な少年如是閑が、雑誌『日本人』や新聞『日本』を創刊号から定期購読していたことは決して怪しむべきこととはいえない。しかし、それだけでは、如是閑が新聞記者になることを決意した決定的な要因とはいえない。如是閑も人並に、将来の職業選択についてあれこれと心が揺れ動いている。その現われが、歴史家志望、法律家志望となったものと思われる。

のちに、如是閑は、明治三〇年代の知識青年を次の三つのタイプに分類している。第一のタイプは、封建制を